

## 自己評価報告書

平成23年4月6日現在

機関番号：34315  
研究種目：基礎研究(C)  
研究期間：2008～2011  
課題番号：20530125  
研究課題名(和文)途上国におけるローカル・ガバナンスとアソシエーションとのシナジー型発展の研究  
研究課題名(英文)A Study on the Synergic Development between Local Governance and Associations in the Developing World  
研究代表者  
松下 冽(MATSUSHITA KIYOSHI)  
立命館大学・国際関係学部・教授  
研究者番号：50229465

研究分野：比較政治学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：ローカル・ガバナンス、民主的分権化、アソシエーション、シナジー型発展

## 1. 研究計画の概要

本研究の目的・内容は次の通りである。

(1) メキシコ、ブラジル、インドの3カ国を対象にローカル・ガバナンスの経験と現実、可能性についての比較研究を行うことにある。

(2) アプローチとしては、ガバナンス構築の制度的側面と主体的・運動的側面、特に各種のアソシエーションに注目して、この両側面のシナジー作用の具体的な実現の在り方を考察する。

(3) ローカル・レベルでの「グッド・ガバナンス」を構築できる条件は何か。上記3カ国の分析を基礎に、「シナジー型ローカル・ガバナンス」という理論的枠組みを提示する。

## 2. 研究の進捗状況

(1) **具体的な研究成果**としては、メキシコ、インド、そして理論的考察についての下記の雑誌論文および図書が挙げられる。

単著、『現代メキシコの国家と政治 グローバル化と市民社会の交差から』は「メキシコの政治面を根源的に論じた本格的分析書」、「日本におけるラテンアメリカ研究の中で、政治論において理論と実証を目指した画期的な著作」(『図書新聞』2010年7月31日)との評価を得た。また、「民主的移行期における「国家-社会」関係変容の一側面(上・下) サリーナス政権期のローカル政治を中心に」では、民主的移行期の「国家-社会」関係変容の複雑さと多様性、改良主義的アクターの役割を明らかにした。

インドについてはケーララ州の分権化

の現状についてピープルズ・プランを中心に考察した。その際、この州の歴史的な社会運動の展開や「ケーララ・モデル」の意義と限界に注目した。この研究成果は下記の2論文である。

本研究の理論的考察と分析枠組みについては、「グローバル・サウスから民主主義を再考する 参加型ローカル・ガバナンスの制度構築」で制度面から一定程度提示した。

(2) **研究ネットワークの構築**という点では、大学や研究所を中心にかなりの成果があった。代表例だけを例示すれば、メキシコではメキシコ国立自治大学(UNAM)、モンテレイ工科大学、エル・コレヒオ・デ・メヒコ、インドでは開発研究所(CDS)、そしてブラジルではサンパウロ大学、リオ・グランデ・ド・スル連邦大学(UFRGS)の研究者たちとの連携強化がある。

(3) **資料収集の面**では、研究対象地域の分権化に関する制度面の実証的な資料と文献、およびガバナンス研究動向に関連する理論書はある程度収集できている。

## 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

上記のように、研究成果は着実に公表できていると考える(「5. 代表的な研究成果」参照)。また、順次、論文公表の予定もある。研究ネットワークの構築により研究対象国の研究者および研究機関からの協力も可能である。

#### 4. 今後の研究の推進方策

平成 23 年は本研究の最終年度である。したがって、本研究のこれまでの成果をまとめ単著として公表することを基本目標に設定する。そのための今後の推進方策を以下のように進める。

(1) 第 1 は、ブラジルのローカル・ガヴァナンスの経験と現状、課題を分析する。これまで、本研究以前にもポルト・アレグレの参加型予算についての研究を公表している。今回はサンパウロなど他の自治体の経験も踏まえて、ブラジルのローカル・ガヴァナンスの事例研究として公表する。

(2) 同時に、三カ国におけるローカル・ガヴァナンスの比較研究を深め、「シナジー型ローカル・ガヴァナンス」構築という視点からその理論的枠組みを分析する。そのために、ある程度関連の理論書を幅広く検討する。

(3) 全体として、ローカル・ガヴァナンス構築と関わって、アソシエーション等の運動面の検討がまだ不十分である。多様な社会運動、市民運動、NGO に絞った調査が再度必要であろう。この調査は「国家-市民社会」関係の変容段階、市民社会の実態を確認するためにも本年度前期中に実現したい。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

松下 洸「民主的ローカル・ガヴァナンスとシナジー型「国家-市民社会」関係(下)

インド・ケーララ州が提起する課題」(『立命館国際研究』、23 巻 3 号、pp.65-105、2011 年、査読有)

松下 洸「民主的ローカル・ガヴァナンスとシナジー型「国家-市民社会」関係(上)

インド・ケーララ州が提起する課題」(『立命館国際研究』、23 巻 2 号、pp.89-120、2011 年、査読有)

松下 洸「民主的移行期における「国家-社会」関係変容の一側面(下) サリーナス政権期のローカル政治を中心に」(『立命館国際研究』、22 巻 3 号、pp.153-191、2010 年、査読有)

松下 洸「民主的移行期における「国家-社会」関係変容の一側面(上) サリーナス政権期のローカル政治を中心に」(『立命館国際研究』、22 巻 1 号、pp.101-126、2009 年、査読有)

松下 洸「メキシコ農村から見た NAFTA の軌跡と現実(下) 農村の貧困化とトルテ

イーリヤ危機」(『アジア・アフリカ研究』、48 巻 2 号、pp.2-34、2008 年、査読有)

〔学会発表〕(計 1 件)

松下 洸「ラテンアメリカと新自由主義その起源からポスト新自由主義まで、そしてメキシコの位置」(東アジア地域研究会、2008 年 6 月 14 日、京都大学)

〔図書〕(計 3 件)

松下 洸『現代メキシコの国家と政治 グローバル化と市民社会の交差から』(御茶の水書房、2010 年、470 頁)

篠田武司・西口清勝・松下 洸『グローバル化とリージョナリズム』(御茶の水書房、2009 年、総 430 頁、179-225 頁分担)

松下 洸「グローバル・サウスから民主主義を再考する 参加型ローカル・ガヴァナンスの制度構築」(加藤哲郎・國広敏文編『グローバル化時代の政治学』法律文化社、2008 年、総 261 頁、27-68 頁分担)